

寒い時期に赤やピンクに咲き誇る椿は非常に美しい。茶道で茶室に飾る茶花の中でも椿は最も出番が多く、日本人がこの花を愛しているのは間違いない。一方でボトリと花を落とすことから「不吉」というイメージをもつ人も多い。こうした相反する感情はなぜ生まれるのだろうか。

長年、茶華道教室を営むなかで生まれたモヤモヤを解き明かしたくて愛知学院大学大学院に進んだのが58歳の時。それからおよそ20年にわたり、民俗学・宗教学の両面から日本人と椿の関係について研究を進めてきた。

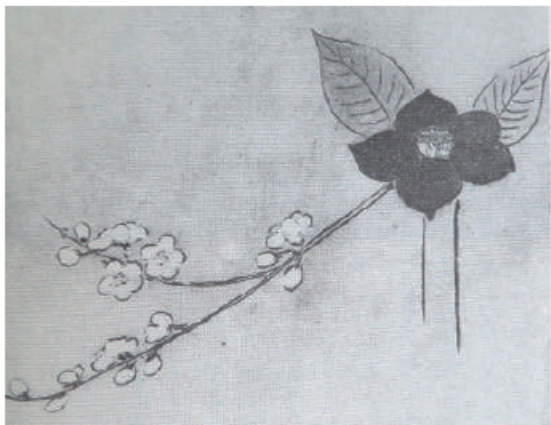
最大の発見は、茶道で必ず椿のつぼみを使う理由だ。大ぶりの花はハツとするほどの美しさなのに、なぜつぼみでなければならぬのか。茶道を始めてからずっと不思議でいろいろの人に聞いて回ったが、「昔からつぼみと決まっている」とお茶を濁され、誰も明確に説明してくれなかった。先行研究を調べたが、まとまったものはない。

椿愛す日本の心を訪ねて

◇茶道、宗教、家紋…日本文化に刻まれた表象を研究◇ 澤田 洋子



茶道の基礎を築いた能阿弥の伝書や茶会の参加者・茶花などを記録した「茶会記」といった文献を網羅的に調べたところ、干利休や古田織部ら名だたる茶人が全開の花を使っていた。ここに掲載した茶花図は江戸前期の茶人、山田宗偏のもの。大輪の椿が描かれている。ところが明治に入るとつぼみが増え、やがてつぼみだけになる。岡倉天心も「茶の本」で、つぼみの美しさを称賛した。研究から見えてきたのは背景にあるジェンター観だ。明治期に一度廃れた茶道は女子の礼儀作法として復興され、女学校に浸透する。茶の専門家、山藤宗山が「咲き盛りの開花より開花前のちやうど嫁入りまえの、番茶も出花の娘のよつこうい



江戸前期の茶人、山田宗偏の茶花図には全開の椿が描かれている

いしいふくらみがよろこばれること述べたように、若く控えめな女性像がつぼみに投影された。茶道再興には少なからず儒教的な精神を取り入れざるを得なかったのだ。

私が椿に心を奪われたのは幼少期。家の裏の寺に咲く真っ赤なヤブツバキが美しく、落ちた花を拾ってネックレスを作って遊んだ。18歳で茶道をはじめ、茶道教室で夫と出会う。2人でいつか茶道教室を開くと誓い、教室を始めたのが28歳。人生は椿に彩られてきた。

研究として最初に取り組んだのは、椿の家紋を探ることだった。椿の不吉なイメージは第2次大戦後の不安な時期に流布したという説がある。そのイメージと結びついた「不吉な椿は家紋に使わない」という通説を覆したかった。実際、家紋はわずかだが存在したことが明らかになり、このテーマで個展を開いた。

その後、修士課程に進み、茶道と椿について研究を進めた。興味は尽きず、教室をたたくで宗教学の博士課程へ。「ツバキ」と名のつく全国43の神社を巡り、来歴を調べ、フィールドワークにも精を出した。

社名は「椿」のほか「都波岐」「津秋」などの表記もある。文献や地名を手がかりに、役場や地元関係者に問い合わせながら各地を訪ねた。たどり

着いたのは椿が単なる觀賞植物ではなく、土地の信仰や記憶と結びついてきたということ。椿には人々に美しさだけでなく、畏れを感じさせる要素があるからだろう。

民俗学や宗教学で椿がテーマの博士論文は1本もなく、「椿で書けるのか？」といふかしがられた。

それでも指導の林淳名誉教授は「書くべきだ」と背中を押してください、夫も応援してくれた。

椿を愛する日本人の心を読み解きたい。椿を見直してほしい。ただその一心で、これからも研究を続けていく。(さわだ・ようこ 元茶華道・書道教室主宰)